

稻作情報

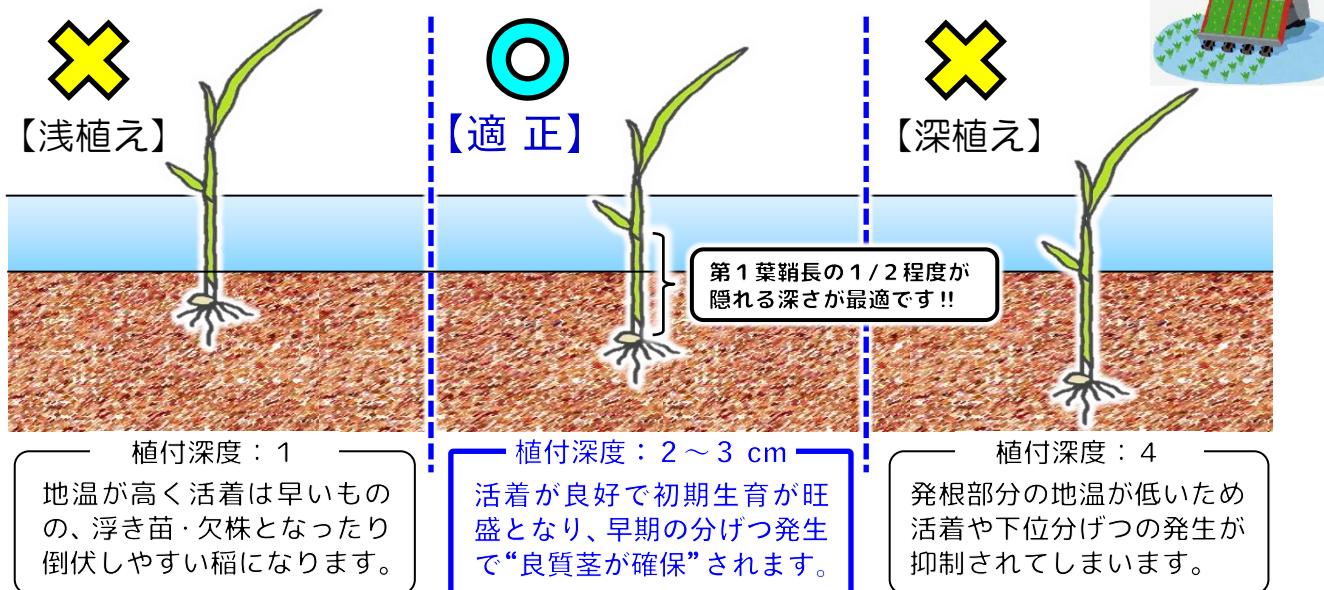
No5「本田水管理～初期除草」

J Aえちご中越 さんとう営農センター
TEL : 0258 (41) 2887

令和7年 4月21日

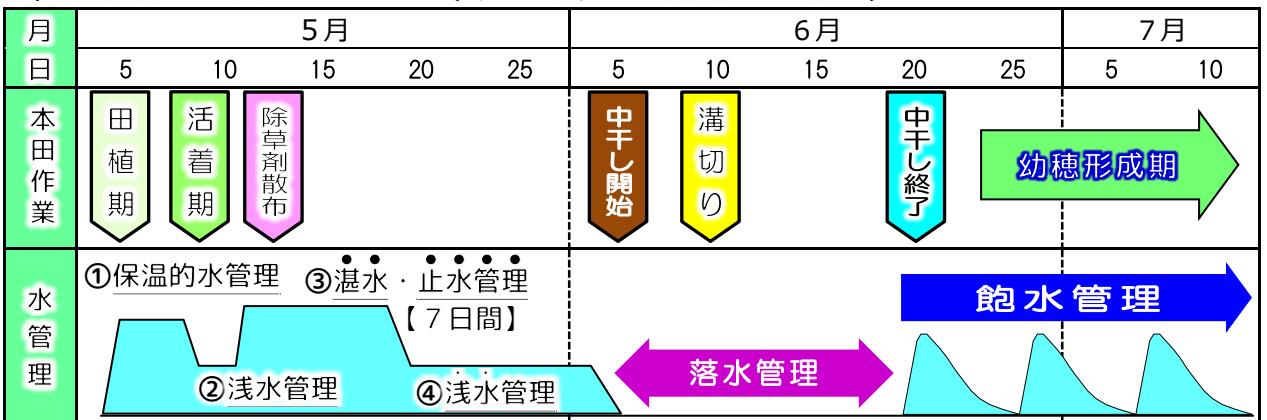
- 品種特性に合わせた「適期田植え」でスタートダッシュ!!
- 適正な植付（深さ・密度）と水管理で初期生育を促進させましょう!!

1. 植付深度をチェック！



2. 田植後の水管理キーワード → 「こまめな水深管理」

(1) 田植後の水管理イメージ（本田除草：一発処理の場合）



(2) 水管理のポイント

- 田植後～活着まで ⇒ “保温的水管理”
“3～5cm”的やや深水として、低温や風による植え傷みを回避します。

② 活着後 ⇒ “浅水管理”

水温の上昇を図り早期分蘖を促進するため、“2～3cmのやや浅水”とします。深水にしすぎると日中暖められた水が夜間に下がりきらず、藻類が発生しやすくなります。また、日中に暖められた深い水によって稲は上に伸びようとするため、ヒヨロヒヨロとした軟弱な稲姿となります。

③ 初中期一発剤散布時 ⇒ “湛水・止水管理”

*詳細は、裏面の止水管理イメージを参照
除草剤散布後4～5日間は、水深3～5cm程度の湛水状態を保ち、散布後7日間はかけ流しや落水しないようにします。やむを得ず入水する場合、除草剤の処理層を壊さないよう静かに入水します。

④ 中干し開始まで ⇒ 田面の高いところが隠れる程度の“浅水管理”

除草剤散布7日後以降は2～3cmのやや浅水とし、ワキやアオミドロの発生を抑えるようにします。

!! 【★ワキの多発生に要注意★】 !!

“ワキ”(異常還元)は、土壤中の有機物(稻わらなど)の分解で発生するメタンガスで多発すると根が障害を受け、生育の停滞や時には枯れ上がってしまうなど、その後の生育や収量に大きく影響します。今春は、昨秋のひこばえの増加による、“ワキ”の多発生が懸念されます。また、5月下旬から6月上旬は1年の中で最も日照時間が長く、地温の上昇とともに“ワキ”が発生しやすくなります。「ワキ対策」として水の更新や夜間落水による“ガス抜き”を行い、その後は“浅水管理”を継続します。

SDGs⑬：「気候変動に具体的な対策を!!
→ワキの発生防止で温室効果ガスを削減します!!



ワキの発生により
“赤枯れ”症状が出た稻

3. 病害虫防除を徹底しましょう

(1) 葉いもち対策 … 補植苗を速やかに除去・処分しましょう!!

補植苗は、いもち病の発生源となります。放置された補植苗で発生・増殖したいもち病の胞子は広範囲(500m以上離れた圃場)に飛散し、伝染してしまいます。
除草剤(初期一発剤)散布までに補植を終了し、補植苗は速やかに処分しましょう!!

★ワキの発生防止と★初期生育の促進を図りましょう!!

★ワキの発生防止と★初期生育の促進を図りましょう!!

★★ 葉いもち病 予防防除のポイント ★★

① 次表の①～③に当てはまる場合には、必ずいもち防除成分を含む育苗箱施用剤を活用します!!

① いもち病の発生しやすい地域	中山間地域や朝霧の晴れにくい・風通しの悪い沢地など
② いもち病の発生しやすいほ場	転作あとなど過剰生育しやすいほ場、ケイ酸質不足のほ場
③ いもち病の発生しやすい品種	新之助・わたぼうし・越淡麗・こしいぶきなど

② 育苗箱施用剤：ブーンパディート剤を活用した葉いもち防除

ブーンパディート剤に含まれるいもち防除成分：ジクロベンチアゾクスは、植物の病害応答反応を強化(いもち病菌の侵入菌糸の進展を阻害～死滅)させる新規の病害抵抗誘導剤です。イネに対する高い安全性を示し、長期残効を有しています。しかし、散布ムラや施用量が不足すると十分な薬剤効果が得られません。移植当日の散布は、作業時間に余裕を持って「1箱あたりの施用量：50gをじゅうかり施用・均一に散布すること」がきわめて重要です!!

*密播・密苗は、「10aあたり使用量1kg」をめやすに1箱あたり使用量を調整(50～100g/1箱)します。

(2) 斑点米カメムシ対策

① 農道・畦畔、雑種地等の雑草管理

5月中下旬から「イネ科雑草(メヒシバ等)の種子が結実しない間隔」で草刈りや除草剤散布を徹底する。

② 本田内雑草の発生防止

ヒエ類やイヌホタルイ等の雑草が多発しないよう水田内の雑草管理を徹底する。

前年度の発生量が多かったことから、越冬世代カメムシ類の多発が懸念されます!!



【指名手配】
アカシジカスミカメ

第1弾

ポイント

地域全体で“春先からの雑草管理”を徹底することにより
「越冬世代をたたく!!」ことが重要なポイントになります。

裏面もご覧下さい!!

4. 本田除草のポイント!

除草剤の散布前にチェックして
“的確な雑草防除”に努めるのジャ!!



©ワンジャ

(1) 本田除草剤「散布前・散布時」の確認事項

水稻本田除草剤（一発処理剤）使用時の10のチェックポイント

No.	チェック項目（作業のポイント）	チェック
1	畦畔は、しっかりと作られている →ねずみ穴等からの漏水がない	<input type="checkbox"/>
2	代かきは、ていねい（均平）に実施されている →田面が極端に露出していない	<input type="checkbox"/>
3	除草剤成分の拡散に必要な水深が確保されている (深い部分を基準に水深確認 → 粒剤：3～5cm 豆つぶ・ジャンボ剤：5～7cm程度)	<input type="checkbox"/>
4	水口・水尻はしっかりと止めてある →多少の降雨で水田水がオーバーフローしないよう、 “水尻は高め”にしてある	<input type="checkbox"/>
5	散布時・散布後の天候をチェックする → 敷設当日から2日くらいの間に「田面水のオーバーフローが心配されるような大雨」や「田面水が極端に片寄るような強風」が予想される場合は散布を避ける →*豆つぶ・ジャンボ剤は、特に風雨の影響を受けやすいので要注意	<input type="checkbox"/>
6	使用農薬の登録内容（適用雑草と使用方法等）を確認してから使用する →代かき後の日数、田植後の日数等を確認して適期に散布する	<input type="checkbox"/>
7	適切な植付深さ（2～3cm程度）で 丁寧に田植えされている →極端な浅植えや植付不良で根が 露出したり浮き苗のある場合は 薬害が出やすくなるので要注意	<input type="checkbox"/>
8	田植同時処理を行う場合には、①薬剤を適正に使用し、薬害の発生防止に努める とともに、②処理時（田植時）はひたひた水の状態で水尻を閉じ、③作業終了後は適正な水深まで緩やかに湛水する	<input type="checkbox"/>
9	補植が完了している →除草剤“散布直後の補植”は、薬害を生じる恐れがあるので要注意	<input type="checkbox"/>
10	ワキ・アオミドロ等の早発が懸念される場合には、登録内容の範囲内で除草剤を 早めに散布する	<input type="checkbox"/>

除草剤の効果を高めるには、丁寧な代かきで“しっかりと田面水を保つこと”、“適期・
好天日に散布すること”が重要なポイントになります。除草剤散布前から散布後までの
ポイントをチェックしながら、適正な管理作業で雑草の無い田んぼに仕上げましょう!!

「春の農作業安全運動」を実施中です。みんなで声掛け「事故防止」!!

【注意】
誤って育苗箱に除草剤を撒いてしまわないように注意して下さい!!



(2) 本田一発除草剤「散布後」の技術対策

<「除草剤処理後7日間は給排水しない止水管理」のイメージ>

~~除草剤を処理した後「7日間」は、田面の水を水田外に出さない
ように排水口を止め、さらにその期間は給水も止める方法です！~~

＜散布時の水管管理チェックポイント＞

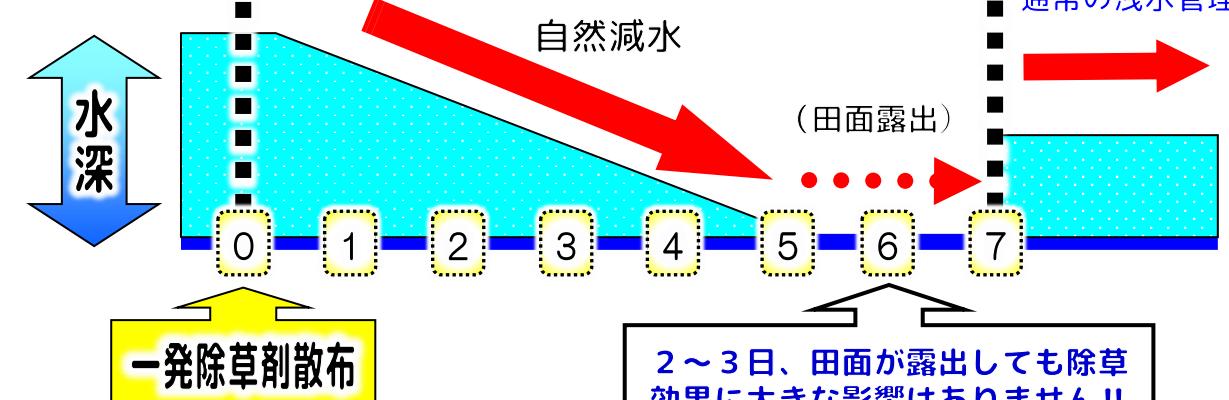
チェック項目	チェック
① 畦畔からの漏水を防ぐ	<input type="checkbox"/>
② オーバーフローしないように排水口をしっかりとふさぐ	<input type="checkbox"/>
③ 水深が浅い部分で3～5cmになるようたっぷり入水する *豆つぶ・ジャンボ剤は5～7cm	<input type="checkbox"/>
④ 給水を止めてから散布する	<input type="checkbox"/>

降雨による田面水のオーバーフローで除草剤が流れ出てしまわないよう排水口を“しっかりと”ふさぐのジャ!!



5～7日間は
給排水しない(注)

ポイント



★ 注意 ★

以下の場合は、除草剤の処理層に影響しない程度の弱い水量で給水して田面水位を維持する

- ① 低温対策など、栽培上湛水が必要な場合
- ② 敷設後すぐ（敷設翌日）に田面が露出するような漏水田
- ③ 田面が露出し、ひび割れが出るほど乾いてしまう場合
→→→ オーバーフローに注意し給水する（*かけ流しに注意）

水田除草剤の“除草効果を高める”には除草剤散布後の水管管理が最も重要です!!



除草剤処理後7日間は給水しない
「止水管理」を行うことで、除草剤処理層がしっかりと形成され、十分な除草（抑草）効果が得られるヨ!!

~~ 営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ ~~
次回稲作情報：5月下旬「中干し開始・終了の目安、葉いもち防除、中後期雑草対策」（予定）